

女子大学生と女子高校生の恋愛観・結婚観と ジェンダー意識との関係

三木 幹子, 植木 由香*

(2010年10月12日 受理)

The Relationship between the Personal View of Love, Marriage and
the Awareness of Gender from the Point of View of
Female Students in University and High School

Motoko MIKI and Yuka UEKI*

Abstract

The survey in question has been carried out in order to investigate the awareness of love, marriage and the awareness of gender from the point of view of female students in University and High School.

As a result of the factor analysis, we have extracted four fundamental factors in “the awareness of love and marriage”, while finding out three fundamental factors in “the awareness of gender”.

It has been obvious that, in consideration of the awareness of love and marriage, those female students in University are more likely to rely on the factor of love, compared with the female students in High School, and that the students in High School have been putting their priority on love rather than financial strength, while the female students in University have been putting their priority on financial strength. The difference between the female students in University and the female students in High School has been significantly clear.

In consideration of the awareness of gender, both students in University and High School have been hoping to get married, instead of following their professional career. They have their substantial awareness of gender, and tend to seek the financial strength of men.

After investigating the relationship between the awareness of love, marriage and the awareness of gender, those individuals being subject to this survey, who have been highly relying on love, and have not been seeking their professional career. Also, it was the students in High School who have had a low level of awareness of gender. In terms of the awareness of love, marriage and the awareness of gender, the relationship between the female students in University and the female students in High School has been significantly clear.

* 広島女学院大学生生活科学部生活デザイン・情報学科実験実習助手

I 緒 言

近年、日本の少子化が社会問題になっており、出生率（合計特殊出生率）低下の原因として、女性の社会進出、若者の未婚化・晩婚化等が挙げられることが多い。実際には、雇用環境の悪化や子育て支援政策の不備等も大きな要因であるにもかかわらず、個人レベルのプライベートな事由が表出するのはなぜだろうか。また、若者、特に若い女性のキャリア志向の向上によって結婚願望の低下を促進しているのだろうか。

本研究では、女子大学生および女子高校生を対象に、若い女性の恋愛観・結婚観とジェンダー意識との関係について考察を行う。

II 調査方法

1. 調査時期

大学生：2009年11月、高校生：2010年7月～8月

2. 調査対象

被験者は女子大学生265名、女子高校生311名、合計576名である。回収率100%、有効回答数576人。

3. 調査内容 質問紙法によるアンケート調査を実施した。

(1) 恋愛と結婚に対する意識調査

女性が日頃抱いている恋愛と結婚に関する理想、願望、価値観等に関する意識質問を20項目設定した。評価にはSD法を用い、各項目について「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階で回答してもらった（評価に用いた質問項目は表1参照）。

(2) ジェンダー意識調査

女性が日常生活で体験するであろう、仕事・結婚・家庭への意識、男女平等、性役割等、ジェンダーを意識する行動に関する質問を25項目設定した。評価にはSD法を用い、各項目について「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階で回答してもらった（評価に用いた質問項目は表2参照）。

表1 因子分析（恋愛と結婚に対する意識調査）

因子負荷量：回転後（バリマックス法）

変 数 名	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
	運命的恋愛志向	恋愛依存	愛情至上主義	保守的恋愛観
運命の赤い糸を信じている	0.6215	0.1668	0.0983	0.0261
理想の恋人（白馬に乗った王子様）が現れると信じている	0.6096	0.0785	0.0017	0.0219
むかしから自分の「未来予想図」を持っている	0.4700	0.1361	0.0434	0.1546
最大の幸せは「結婚」だ	0.4109	0.2547	0.2024	0.2258
結婚したら相手に生涯愛される自信がある	0.3235	0.1459	0.0588	-0.0939
彼氏には思いっきり甘えたい	0.2305	0.5086	-0.0788	-0.0399
恋人から数日間連絡がないと心配で眠れない	0.2228	0.4616	0.0607	0.1569
人前で恋人と平気でいちゃいちゃできる	0.2158	0.4587	-0.0808	-0.1460
友達との友情よりも恋人との恋愛が優先	0.0532	0.4522	0.0401	0.0770
愛があれば貧乏生活も耐えられる	0.0880	0.1131	0.4846	-0.0147
経済力も男性の重要な魅力のひとつだと思う	0.1460	0.1152	-0.4604	-0.0107
一生、ひとりの異性だけを愛し続けることは難しいと思う	-0.0956	-0.0325	-0.3906	-0.0526
結婚と恋愛は別だ	-0.0847	-0.0608	-0.2965	-0.2037
恋人から高価なプレゼントをされると愛情が増す	0.2063	0.1951	-0.2894	0.1472
条件がよければお見合い結婚でもよい	-0.0712	0.0333	-0.2593	-0.0442
自分は理想が高いと思う	0.2352	-0.2551	-0.2164	0.0140
結婚する気のない異性とは本気でつきあえない	0.1663	0.0647	0.0936	0.4747
男と女は結婚まで性的関係を持つべきではない	-0.0057	-0.2841	0.1292	0.4089
かっこよすぎる異性とは浮気が心配でつきあいたくない	-0.1931	0.0989	-0.0200	0.4001
恋人が一度でも浮気をしたら絶対別れる	0.0599	-0.0071	0.0040	0.3492
固有値	1.6214	1.2550	0.9849	0.8813
寄与率（%）	8.11	6.28	4.92	4.41
累積寄与率（%）	8.11	14.38	19.31	23.71

Ⅲ 結果・考察

1. 恋愛と結婚に対する意識調査

(1) 因子分析

女子大生と女子高生の恋愛と結婚に対する意識の基本因子をそれぞれ抽出するために、20個の質問項目を変数に、被験者576名の全評価を観測回数として因子分析を行った。評価値は「全く思わない」から「そう思う」までを1～5点とした。因子分析には主因子法を用い、バリマックス回転法により、軸回転後の因子負荷量および各被験者の因子得点を求めた。

因子分析を行った結果、表1に示すような4因子が抽出された。第3因子と第4因子は固有値が1.0に近い採用することにした。因子負荷量より各因子の意味を検討した結果、第1因子は、「運命の赤い糸を信じている」「理想の恋人（白馬に乗った王子様）が現れると信じている」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“運命的恋愛志向の因子”と解釈した。第2因子は「彼氏には思っきり甘えたい」「恋人から数日間連絡がないと心配で眠れない」「人前で恋人と平気でいちゃいちゃできる」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“恋愛依存の因子”と解釈した。第3因子は「愛があれば貧乏生活も耐えられる」「経済力も男性の重要な魅力のひとつだと思う（マイナス値＝思わない）」「一生、ひとりの異性だけを愛し続けることは難しいと思う（マイナス値＝思わない）」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“恋愛至上主義の因子”と解釈した。第4因子は「結婚する気のない異性とは本気でつきあえない」「男と女は結婚まで性的関係を持つべきではない」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“保守的恋愛観の因子”と解釈した。

(2) 因子得点の分布

女子大生および女子高生の恋愛と結婚に対する意識の各因子について因子得点を算出し、全被験者の因子得点の位置関係を検討した。第1因子と第2因子の分布図を図1に、第3因子と第4因子の分布図を図2に示す。

図1は、よこ軸が第1因子“運命的恋愛志向の因子”，たて軸が第2因子“恋愛依存の因子”を示している。各因子のプラスとマイナスの組合せにより、被験者をA、B、C、Dの4領域に分類することができる。

A領域に分布している被験者は、第1因子がプラス、第2因子がプラスであり、運命の出会いを信じており、また恋愛に依存する傾向が強く、何よりも恋愛を優先する意識が強いという、純粋で理想的な恋愛を好むタイプの女性である。この領域に属する被験者は多く、特に女子高生の分布が多い。

B領域に分布している被験者は、第1因子がマイナス、第2因子がプラスであり、恋愛依存傾向は強いが、運命的な出会いは期待していない。現実的な恋愛志向の女性といえる。

C領域に分布している被験者は、第1因子がプラス、第2因子がマイナスであり、運命的な出会いを期待しているが、恋愛に関しては冷静な判断と対応をすることができる。この領域に属する被験者は少なく、特に女子大生は少数派であるといえる。

D領域に分布している被験者は、第1因子がマイナス、第2因子がマイナスであり、運命的な出会いを期待しておらず、恋愛に依存することもないという、恋愛に関しては冷静な思考と対応ができる女性であるといえる。この領域に分布する被験者は多く、特に女子高校生の分布が多く見られる。

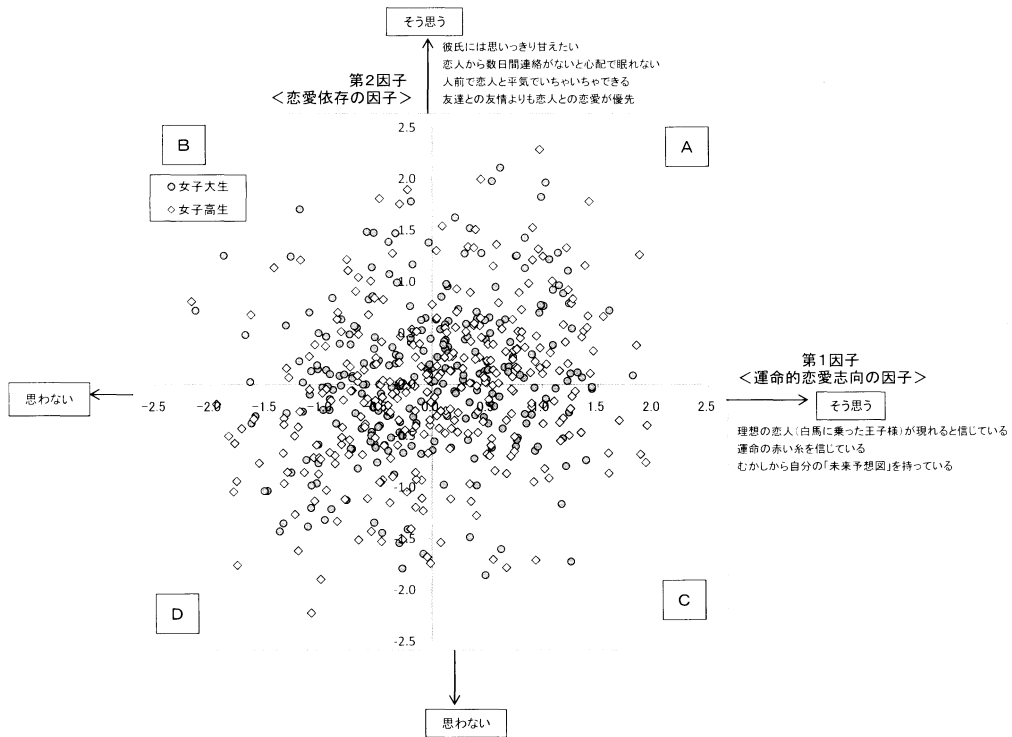


図1 恋愛と結婚に対する意識 因子得点の分布 (第1因子と第2因子)

以上のことから、特に女子高校生の恋愛観は、恋愛に夢中になりがちな被験者と、反対に恋愛に無関心な被験者との二極化の傾向があることがわかる。恋愛依存に関しては、大学生の方が実際に恋愛を経験する機会が多くなるため、恋愛依存の因子がプラスになる傾向が強い。反対に高校生の場合は恋愛はまだ空想上の事柄であり、そのため恋愛依存の因子はマイナスの被験者が多くなったと考えられる。

図2は、よこ軸が第3因子“愛情至上主義の因子”，たて軸が第4因子“保守的恋愛観の因子”を示している。各因子のプラスとマイナスの組合せにより、被験者をE、F、G、Hの4領域に分類することができる。

E領域に分布している被験者は、第3因子がプラス、第4因子がプラスであり、男性の経済力よりも愛情の深さを重視しており、また恋愛に対しては保守的な考えを持っている。すなわち、一途で献身的な昭和的良妻賢母の理想型といえる。

F領域に分布している被験者は、第3因子がマイナス、第4因子がプラスであり、男性の経済力を重視しているが、恋愛観は保守的な女性である。すなわち、恋愛や結婚に対しては慎重かつ堅実であるといえる。この領域に属している被験者は多い。

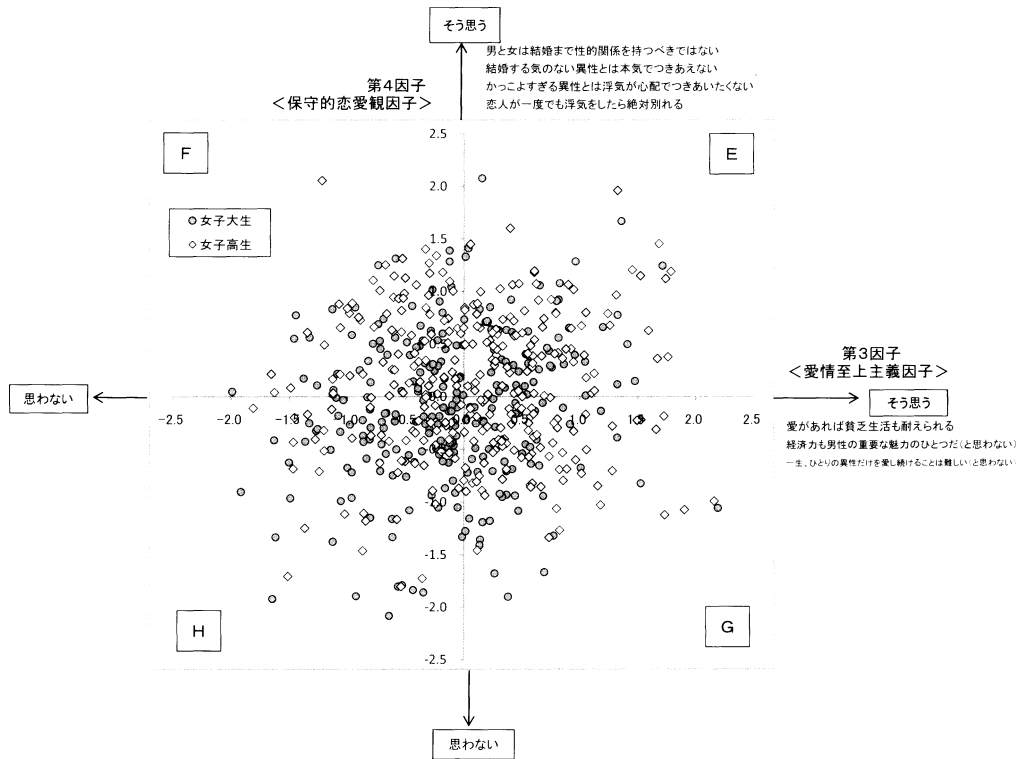


図2 恋愛と結婚に対する意識 因子得点の分布 (第3因子と第4因子)

G領域に分布している被験者は、第3因子がプラス、第4因子がマイナスであり、経済力よりも愛情を求めており（いわゆる「愛があればお金は必要ない」という考え方）、また恋愛に対しては進歩的な考えを持っている。すなわち、恋愛に関して自由奔放で開放的な女性であるといえる。この領域に属する被験者は比較的少ない。

H領域に分布している被験者は、第3因子がマイナス、第4因子がマイナスであり、男性に対しては経済力を重視し、進歩的な恋愛観を持っている。いわゆる80年代後半～90年代前半の“バブル景気”に象徴される資本主義的消費志向タイプの女性である。この領域に属する被験者は、女子高生は少なく、女子大生が多く分布している。

「愛情かお金か」（第3因子）という意識については、プラスとマイナスに同じ割合で分布をしているが、大学生と高校生を比較すると、高校生の方がプラスに多く分布しており、「愛情」を重視しているのに対し、大学生はマイナスに多く分布しており、「経済力」を重視しているといえる。

2. ジェンダー意識調査

(1) 因子分析

女子大生と女子高生のジェンダー意識についての基本因子を抽出するために、25個の質問項目を変数に、被験者576名の全評価を観測回数として因子分析を行った。評価値は「全く思わない」から「そう思う」までを1～5点とした。因子分析には主因子法を用い、バリマックス回転法により、軸回転後の因子負荷量および各被験者の因子得点を求めた。

因子分析を行った結果、表2に示すような固有値1.0以上の3因子が抽出された。因子負荷量より各因子の意味を検討した結果、第1因子は、「結婚して幸せな家庭を持つことは女の最大の幸せだ」「男には（勉強や仕事で）負けたくない（マイナス値＝思わない）」「就職したら男性と同等に働きたい（マイナス値＝思わない）」「困ったときは彼氏や夫に頼りたい」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“男性依存（専業主婦志向）の因子”と解釈した。第2因子は、「結婚の条件として男性の経済力は重要である」「男なら電気配線等が得意であって欲しい」「デートの時は男性におごってほしい」「化粧は大人の女性のたしなみである」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“ジェンダー意識・男らしさ要求の因子”と解釈した。第3因子は、「腹へった」「ウマイ」等の男言葉をよく使う」「座っているといつの間に両脚が開いている」「常にカバンの中にハンカチとティッシュが入っている（マイナス値＝入っていない）」等の因子負荷量が高い値を示していることから、“男性的行動の因子”と解釈した。

(2) 因子得点の分布

女子大生および女子高生のジェンダー意識の各因子について因子得点を算出し、全被験者の因子得点の位置関係を検討した。第1因子と第2因子の分布図を図3に、第1因子と第3因子の分布図を図4に示す。

図3は、よこ軸が第1因子“男性依存（専業主婦志向）の因子”，たて軸が第2因子“ジェンダー意識・男らしさ要求の因子”を示している。各因子のプラスとマイナスの組合せにより、被験者をa, b, c, dの4領域に分類することができる。

a領域に分布している被験者は、第1因子がプラス、第2因子がプラスであり、キャリア志向が低く、結婚願望が強い。またジェンダー意識が高く、特に男性に対して役割を強く要求している。そのため結婚後は専業主婦になることを希望しており、仕事よりも女性としての幸せを追求したいというタイプの女性である。女子大生、女子高生の両者とも、この領域での分布が最も多い。

b領域に分布している被験者は、第1因子がマイナス、第2因子がプラスであり、自立心とキャリア志向が高く、またジェンダー意識も強く持っている。仕事で自立したいと思っている

表2 因子分析 (ジェンダー意識調査)

因子負荷量: 回転後 (バリマックス法)

変数名	第1因子	第2因子	第3因子
	男性依存 (専業主婦 志向)	ジェンダー 意識・男ら しき要求	男性的行動
結婚して幸せな家庭を持つことは女の最大の幸せだ	0.5415	0.1455	0.0000
男には(勉強や仕事で)負けたくない	-0.4506	0.1813	-0.0127
就職したら男性と同等に働きたい(転勤・出張OK)	-0.4556	0.0974	0.0404
出産祝いを買うとしたら, 女の子にはピンクや赤の品物を選ぶ	0.4189	0.2981	0.0767
困ったときは彼氏や夫に頼りたい	0.3548	0.2168	0.0610
女性なら料理や家事はできないといけないと思う	0.3397	0.1926	-0.0382
好意を持っている男性の前では女らしくなる	0.3278	0.2792	-0.0060
今度生まれ変わっても女に生まれたい	0.3140	0.2742	-0.2083
結婚の条件として男性の経済力は重要である	-0.0277	0.5126	0.0039
お店のレディースデーや女性割引は積極的に活用したい	0.0125	0.4539	0.0599
男なら電気配線等が得意であって欲しい	0.0895	0.4071	-0.0062
デートの時は男性におごってほしい	0.1662	0.3652	0.1869
化粧は大人の女性のたしなみである	0.1557	0.3351	-0.0004
今の世の中, 女性の方が得だと思う	0.1475	0.3236	0.0366
「腹へった」「ウマイ」等の男言葉をよく使う	-0.1774	-0.0415	0.5362
座っているといつの間にか両脚が開いている	0.1064	-0.0313	0.5105
常にカバンの中にハンカチとティッシュが入っている	0.0864	0.1682	-0.4288
友達とエッチな会話が普通にできる	0.2482	0.1992	0.4000
涙は女の武器である	0.2520	0.2852	0.0115
ミスコンは女性差別だと思う	0.0487	0.0609	0.0728
肌を露出するファッション(ミニスカート, キャミソール)に抵抗がない	0.1383	0.1332	0.1603
将来, 私が家を継いで両親の面倒をみたい	0.0000	0.0711	-0.0095
今の日本社会は男女平等だ	0.1437	0.1137	0.0530
女が2日続けて同じ服を着ることは恥ずかしい	0.2513	0.0321	0.0619
外出前に下着や体が透けていないかどうかチェックする	0.0185	0.1728	-0.0813
固有値	1.6901	1.5968	1.0326
寄与率(%)	6.76	6.39	4.13
累積寄与率(%)	6.76	13.15	17.28

が, 男性に対しても男らしさを要求しており, 自分自身も女性らしくあろうと心がけているといえる。この領域は, 女子大生よりも女子高生の方が分布が多く, 特に第2因子の値が高い被験者が多いという傾向がみられる。

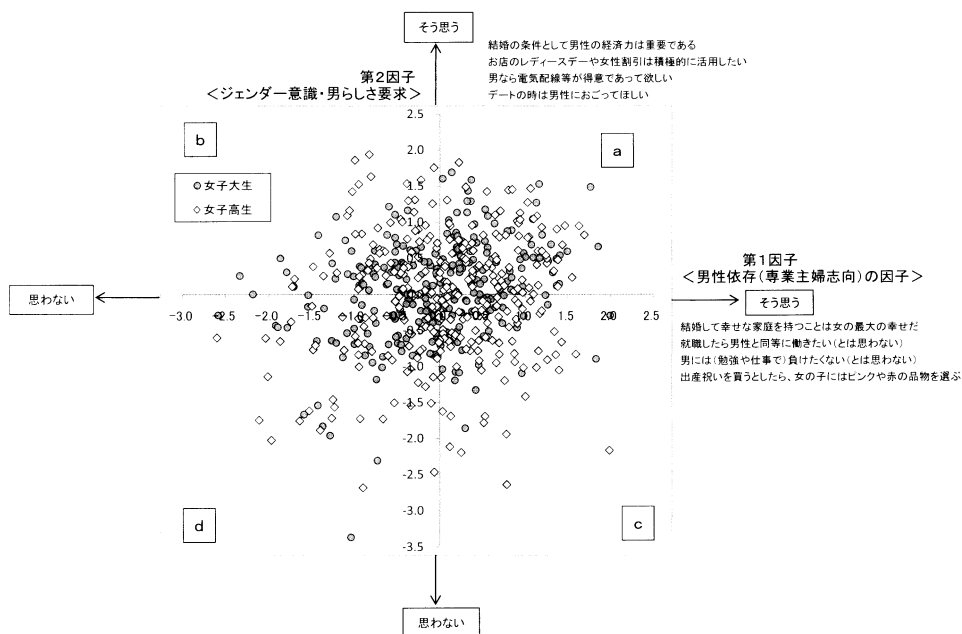


図3 ジェンダー意識 因子得点の分布 (第1因子と第2因子)

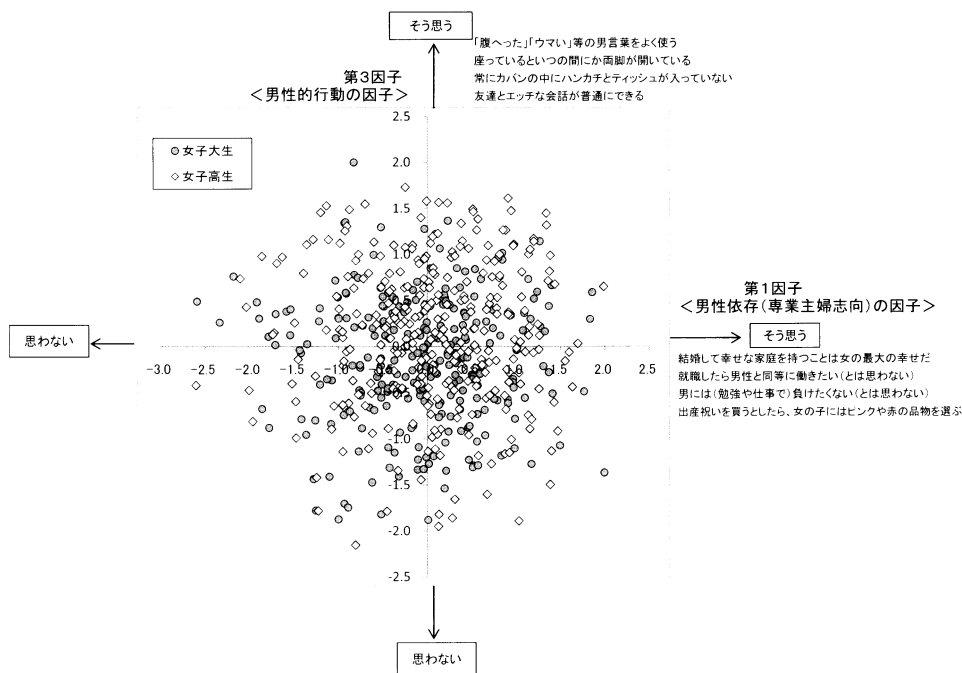


図4 ジェンダー意識 因子得点の分布 (第1因子と第3因子)

c 領域に分布している被験者は、第1因子がプラス、第2因子がマイナスであり、キャリア志向が低く、男性への依存心が強い。また、ジェンダー意識が低く、男らしさ・女らしさの役割を意識していないといえる。要するに就職や結婚等の将来を具体的にイメージしていない未成熟な思考であり、この領域に分布する被験者は少ないが、女子大生よりも女子高生の方が多く分布している。

d 領域に分布している被験者は、第1因子がマイナス、第2因子がマイナスであり、キャリア志向が強く、ジェンダー意識は低い。すなわち全く男性には頼らず、期待せず、自分が女性であることに甘えることなく男性と同等に働きたいという願望が強いといえる。この領域に分布する被験者は少ないが、女子大生よりも女子高生の方が若干多く分布している。

高校生の方がキャリア意識が強く、かつ男性の経済力を重視しない被験者が多い理由は、高校生にとって就職や結婚は遠い将来のことであり、具体性や実感を持つことが難しいからだと思われる。反対に大学生の場合、就職活動はより身近な出来事として実感しており、現在の不況の社会状況下において、自分が就職できるかどうかという不安を抱えた被験者にとっては、この傾向は本音が出した結果といえるだろう。

以上のことから、被験者は全体的にジェンダー意識を強く持っており、特に男性に対しての経済力を含む男らしさの欲求は強いことがわかる。また、専業主婦志向を持つ被験者がかなり多く、不景気、就職難等の現在の社会事情により、女性の意識も影響を受けているといえる。

図4は、よこ軸が第1因子“男性依存（専業主婦志向）の因子”，たて軸が第3因子“男性的行動の因子”を示している。第3因子について傾向をみてみると、女子大生はマイナスに、女子高生はプラスに多く分布していることがわかる。すなわち、女子大生の方が女性らしさを意識した行動を心がけているということである。

3. 恋愛と結婚に対する意識の違いによる、ジェンダー意識の比較

女子大生と女子高生の恋愛観・結婚観の違いがジェンダー意識にどのような影響を与えるのかについて検討するため、恋愛と結婚に対する意識の分析結果を、ジェンダー意識の因子得点分布に反映させ、両者の関係を考察する。

恋愛と結婚に対する意識の因子分析結果から、各因子の因子得点の標準偏差 (σ) を算出した。

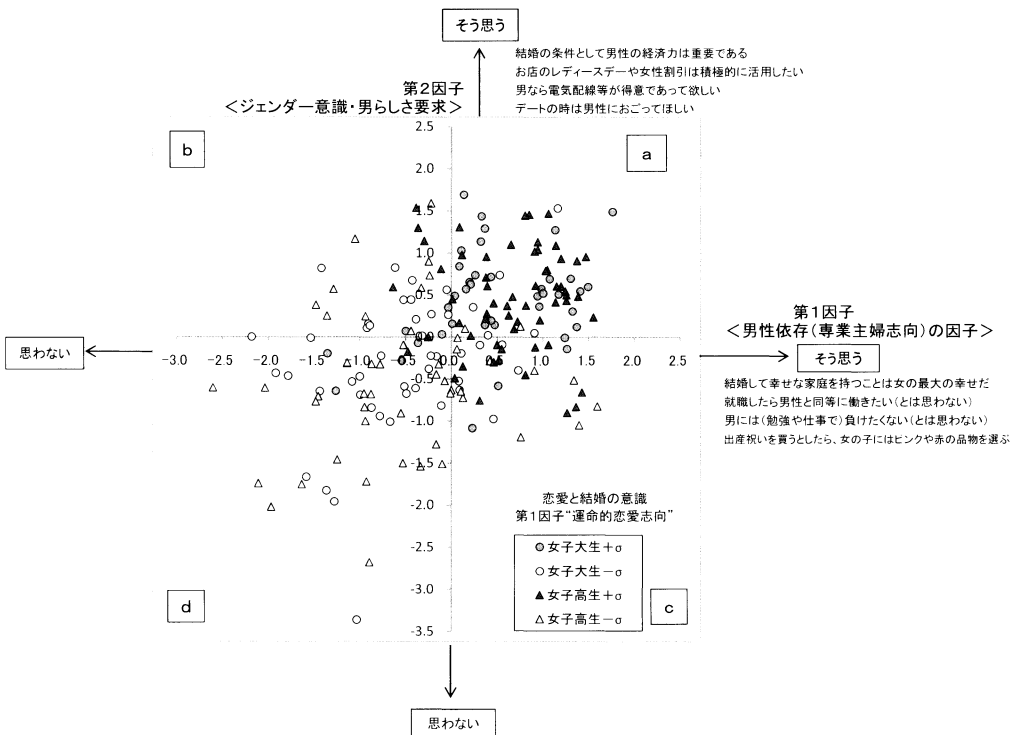
各因子の標準偏差：第1因子0.8060、第2因子0.7553、第3因子0.7309、第4因子0.7127

次に、被験者の恋愛と結婚に対する意識の因子得点を、平均値 $+\sigma$ 以上のグループと、平均値 $-\sigma$ 以下のグループに分け、ジェンダー意識の因子得点分布図上に記号を変えて表示した。

●：女子大生 ($+\sigma$)、○：女子大生 ($-\sigma$)、▲：女子高生 ($+\sigma$)、△女子高生 ($-\sigma$)

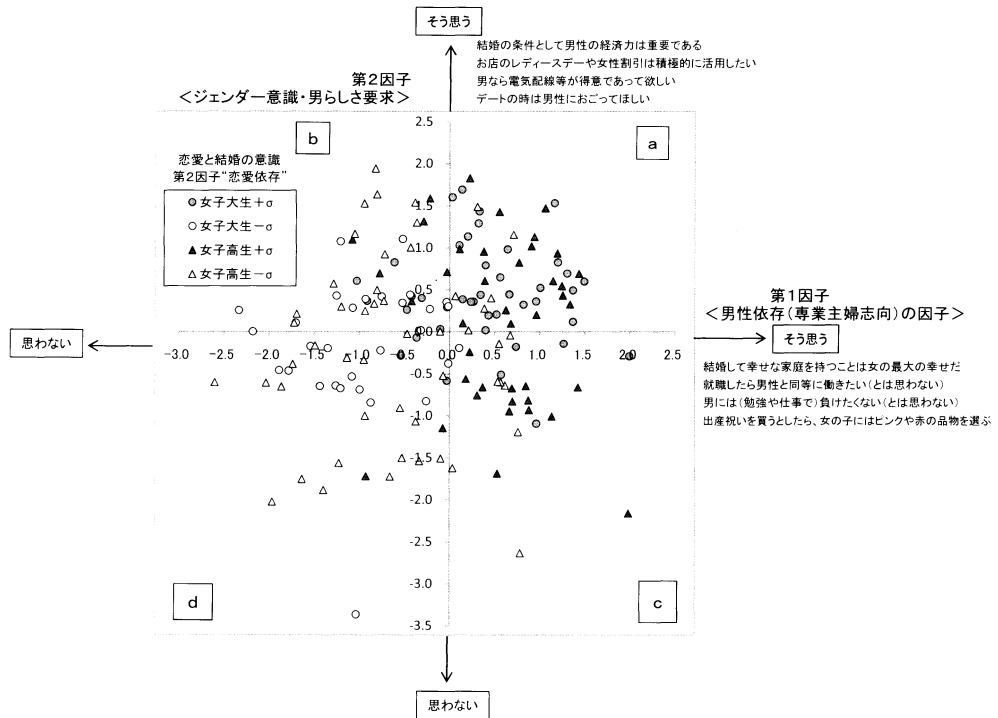
図5はジェンダー意識の第1因子“男性依存（専業主婦志向）”と第2因子“ジェンダー意識・男らしさ要求”の因子得点分布図である。恋愛と結婚の意識の第1因子“運命的恋愛志向の因子”の因子得点がプラスの被験者（+σ）とマイナスの被験者（-σ）に分けて示している。女子大生、女子高生共に、+σの被験者のほとんどがa領域に分布していることがわかる。運命的な恋愛志向の強い被験者は、キャリア志向が低く、結婚願望が強い。またジェンダー意識が強く、男性に経済力を求める傾向があるということがわかる。反対に-σの被験者は、第1因子がマイナスの領域（b、d）に大部分が分布している。すなわち運命の出会いを信じていない被験者は、自立心とキャリア志向が高いといえる。

図6は、ジェンダー意識の第1因子と第2因子の因子得点分布図上に、恋愛と結婚の意識の第2因子“恋愛依存の因子”の因子得点がプラスの被験者（+σ）とマイナスの被験者（-σ）に分けて示している。仕事や勉強よりも恋愛を優先するという+σの被験者は、ほとんどが第1因子プラス側に分布している。すなわち恋愛依存が強い被験者は、キャリア志向が低く専業主



恋愛と結婚の心理：第1因子“運命的恋愛志向”，プラス（+σ）被験者とマイナス（-σ）被験者比較
ジェンダー意識：第1因子と第2因子

図5 「恋愛観・結婚観」の違いによる「ジェンダー意識」の因子得点分布



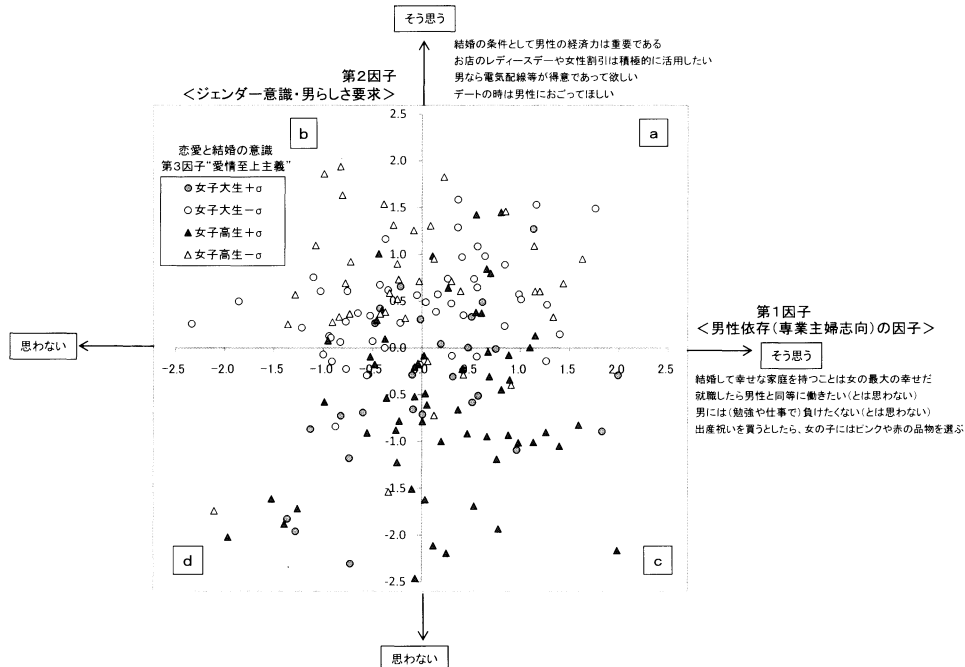
恋愛と結婚の心理：第2因子“恋愛依存”，プラス(+σ)被験者とマイナス(-σ)被験者比較
ジェンダー意識：第1因子と第2因子

図6 「恋愛観・結婚観」の違いによる「ジェンダー意識」の因子得点分布

婦志向が強いということである。+σの被験者の内、女子大生は大多数がa領域に分布しており、ジェンダー意識が強く、男性に経済力を求めているといえる。女子高生の+σはc領域においても多く分布がみられることから、高校生の時期にはまだ男性に経済力を必要としない人が存在していることがわかる。反対にマイナスの被験者(-σ)の場合、ほとんどの被験者が第1因子マイナス側に分布していることから、恋愛依存が低い被験者はキャリア志向が高く自立心が強いといえる。

図7は、ジェンダー意識の第1因子と第2因子の因子得点分布図上に、恋愛と結婚の意識の第3因子“愛情至上主義の因子”の因子得点がプラスの被験者(+σ)とマイナスの被験者(-σ)に分けて示している。

因子得点プラス(+σ)の被験者は第2因子がマイナス側に分布しており、-σの被験者は第2因子プラス側に分布していることがわかる。すなわち、愛情至上主義因子がプラスの被験者(+σ)は、「愛があればお金は必要ない」と考えており、ジェンダー意識が低く、男性に経済力を求めているといえる。反対に愛情至上主義因子がマイナスの被験者(-σ)の場合、

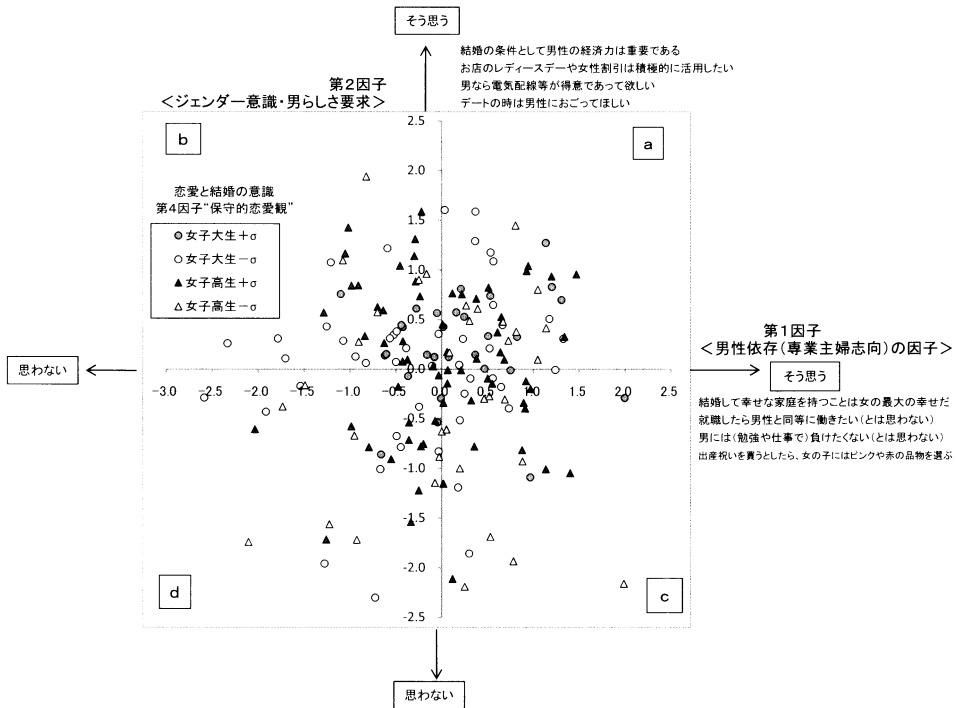


恋愛と結婚の心理：第3因子「愛情至上主義」、プラス (+σ) 被験者とマイナス (-σ) 被験者比較
ジェンダー意識：第1因子と第2因子

図7 「恋愛観・結婚観」の違いによる「ジェンダー意識」の因子得点分布

男性の経済力を重視しており、男女の性役割割りに対して明確な差を認識しているといえる。プラス被験者 (+σ) の中で女子大生と女子高生を比較すると、女子大生が第2因子中央付近に分布しているのに対して、女子高生はかなりマイナス側に分布している。このことから、高校生の方がジェンダー意識が低く、男性に男らしさ(経済力)を求めているといえる。

図8は、ジェンダー意識の第1因子と第2因子の因子得点分布図上に、恋愛と結婚の意識の第4因子「保守的恋愛観の因子」の因子得点がプラスの被験者 (+σ) とマイナスの被験者 (-σ) に分けて示している。保守的恋愛観の因子得点が +σ の被験者も -σ の被験者も、第1因子、第2因子共にプラス側とマイナス側に均一に分布している。このことから、恋愛に保守的か進歩的かということと、ジェンダー意識との間には明確な差は存在していないといえる。ただし、女子大生 (+σ) の被験者は第2因子プラス側に多く分布していることから、恋愛に保守的な女子大生は、ジェンダー意識が強く、男性の経済力を重視していることがわかる。



恋愛と結婚の心理：第4因子“保守的恋愛観”，プラス(+σ)被験者とマイナス(-σ)被験者比較
ジェンダー意識：第1因子と第2因子

図8 「恋愛観・結婚観」の違いによる「ジェンダー意識」の因子得点分布

ま と め

女子大学生および女子高校生を対象に、恋愛と結婚に対する意識調査、およびジェンダー意識に関するアンケート調査を行い、因子分析により両被験者、両意識の関係を考察した結果、以下のことが明らかになった。

1. 恋愛と結婚に対する意識調査について因子分析を行った結果，“運命的恋愛志向の因子”“恋愛依存の因子”“愛情至上主義の因子”“保守的恋愛観の因子”の4因子が抽出された。
2. 女子高校生の恋愛観については、恋愛依存が強い被験者と、反対に恋愛に無関心な被験者との二極化の傾向がある。また、大学生の方が恋愛の機会が多いため、恋愛依存因子がプラスになる傾向が強い。反対に高校生の場合は恋愛未経験者が多く、恋愛依存の因子はマイナスの被験者が多い。

“愛情至上主義の因子”について大学生と高校生を比較すると、高校生の方がプラスの分布が多く「愛情」を重視しており、大学生はマイナス側に多く分布しており、「経済力」

を重視しているといえる。

3. ジェンダー意識について因子分析を行った結果，“男性依存（専業主婦志向）の因子” “ジェンダー意識・男らしさ要求の因子” “男性的行動の因子” の3因子が抽出された。
4. ジェンダー意識の第1因子と第2因子がプラスの被験者が最も多かった。すなわち、キャリアよりも結婚を望み、またジェンダー意識が高く、男性に対しては経済力を求める傾向が強い。

高校生の方がキャリア意識が強く、かつ男性の経済力を重視しない被験者が多いが、大学生は就職を高校生よりも具体的に実感し、不安を抱えていることから、専業主婦志向および男性の経済力を重視する傾向が強くなったと考えられる。

5. “男性的行動の因子” より、女子大生の方が女性らしさを意識した行動を心がけているということがわかった。
6. 恋愛と結婚の意識とジェンダー意識との関係について検討した結果、以下のことが明らかになった。
 - ・ 運命的な恋愛志向が強い被験者は、キャリア志向が低く、結婚願望が強い。またジェンダー意識が高く、男性に経済力を求める傾向が強い。
 - ・ 恋愛依存が強い被験者は、キャリア志向が低く専業主婦志向が強い。
 - ・ 愛情至上主義因子がプラスの被験者（「愛があればお金は必要ない」と考える人）は、ジェンダー意識が低く、男性に経済力を求めている。
 - ・ 高校生の方がジェンダー意識が低く、男性に対して経済力を求めている。

最後に、アンケートにご協力いただいた皆様へお礼を申し上げます。

文 献

- 三木幹子, 「女子大生のメンズファッションに対する意識と着用実態 (第1報)—パンツ・スタイル画像の視覚評価—」, 広島女学院大学論集, 第56集, 2006年12月, pp. 97-108
- 三木幹子, 「女子大生のメンズファッションに対する意識と着用実態 (第2報)—パンツ・スタイルのイメージとジェンダー意識の関係—」, 広島女学院大学生活科学部紀要, 第14号, 2007年3月, pp. 1-14
- 山田昌弘, 白河桃子, 『「婚活」時代』, デイスクヴァー・トゥエンティワン, 2008年
- 森岡正博, 『草食系男子の恋愛学』, メディアファクトリー, 2008年
- 厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/>
- 国立社会保障・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/>